

# 英語における間接受動構文の発達

山川喜久男

## I

一般に、西欧語における受動態 (Passive voice) は、論理的に能動態 (Active voice) に対応する陳述の言語形式であると考えられている。受動態に対する主語が、能動態に対する目的語に相当するということが自明の原理とみなされ、それが実際の言語表現を規定しているのは事実である。しかし、このように受動態という述語動詞の形式を論理的に理解しているだけでは、特定言語に見られる現実の統語現象としての受動構文の実相を十分に識認しえていたとは言えない。近代英語の受動態の1種に、*I have been given a new hat.* におけるように、あとに直接目的語を従えている構造が慣用化し確立しているという現象を考えると、単に受動態を含む文構造が能動態を含む文構造に論理的に対応するという考え方のほかに、受動態という叙述様式そのものに焦点を置いた考察が要請されよう。

現実の言語史上においても、受動態の主語に対応する能動態の対格目的語 (Accusative object) に当たっているのが普通である。もともと、対格 (Accusative case) は、斜格 (Oblique cases) のうちでも、主格 (Nominative case) に直接に対立する関係にある概念を示す格であり、他動詞の目的語になりうる資格をもっとも多分に備えた形態である。この対格で表現される目的語が受動態に対しては主語として主格で表現されるようになるという過程は、上に述べた能動・受動の両構文の間に認められる論理的関係が、言語形式上に忠実に写し出されたものにほかならない。同じ斜格でも、与格 (Dative case) は主格に間接的に対立する関係にある概念を示している。それは動作に関与する対象をさし、しばしば動作による物理的および精神的利害関係の及ぼされる人を示すのが本質的な機能である。統語上の要素としての目的語は、多

かれ少なかれ述語動詞の表わす動作や状態に対し従属的關係にある対象をさすものであるが、与格で表現される目的語は、対格で表現される目的語にくらべ、いっそう間接的な従属要素であり、それだけ副詞性の多いものである。述語動詞のうちには、授与・伝達・欲求・拒絶などに類する行動を表わすもので、その対象として直接的なものをさす直接目的語 (Direct object) と間接的な人をさす間接目的語 (Indirect object) を従える種類のものがあるが、形態上では、普通、前者に対格が、後者に与格があてがわれるのも、対格と与格との特徴的な機能に帰せられることである。この種の二重目的語 (Double object) を従える動詞が受動態で表現されるとき、能動態に対する直接目的語としての対格が主語として主格で表わされ、能動態に対する間接目的語としての与格はそのまま保留されることとなる<sup>\*</sup>。ドイツ語の例で言えば、<sup>\*\*</sup> *Mir hat er einen neuen Hut gegeben.* に対する受動構文は、*Mir ist ein neuer Hut gegeben worden.* である。

英語は中期英語の時期以来、対格と与格との形態上の区別が失われ、語形上では直接目的語と間接目的語とは識別されがたいものとなっているが、いずれにせよ、上にあげたドイツ語の文に平行する構文として、*I have been given a new hat.* が発達しているという事実は注意されるべきである。屈折語であるドイツ語では、強調されている人をさす *mir* が与格のまま文頭に表現されているのに対し、分析語である英語では、人をさす *I* が文頭に主格の形態で表わされ、ものをさす *a new hat* が受動態のあとに保留されている。二つの国語の表現法を比較するとき、ドイツ語では、意味上のリズムが固定した形態のわく内で文構造の上に打ち出されているのに対し、英語では、文構造が形態上でも意味のリズムに調和しているといえることができる。もちろん英語にも、*A new hat has been given me.* のような構文が存在するが、それは *I have been given a new hat.* とは、違った文脈で違った意味のリズムをもって用いられる文である。前者は、統語上の間接目的語を保留しており、対応する能動構文における直接目的語を主語とし、論理上、能動構文から直接に引き出される受動構文であるという点で、上にあげたドイツ文と共通している。それに対し、後者は、統語上の直接目的語を保留し、対応する能動構文における間接目的語を主語とし、

\* もっとも、屈折語のうちでもギリシア語に次のような間接受動構文の見られることは注目しに値する。*"Άλλο τι μεῖζον ἐπιταγήσεσθε.* —Thucydides, i. 140. (=You will have some other greater command imposed on you.) (cf. Active: *"Άλλο τι μεῖζον ὑμῖν ἐπιτάξουσιν.* [*ὑμῖν* (=you) は与格形]) (q. Goodwin, *A Greek Grammar* § 1239).

\*\* Curme, *A Grammar of the German Language* (2nd ed.) p. 525 による。

論理的には間接的にしか認容されえない受動構文である。本稿では、*A new hat has been given me.* で代表される受動構文を「直接受動構文」(Direct passive construction) と称し、それに対し、英語特有の *I have been given a new hat.* で代表される受動構文を「間接受動構文」(Indirect passive construction) と称して、後者が英語の統語法に発達した事情とその構造上ないし意味上の特質を探ってみたいと思う。

## II

英語に間接受動構文を発達させた要因は、英語史上における形態変遷という特殊事情と統語上に認められる特質との2面に求められる。この二つの要因は、英語史上の各時期にわたって、表裏一体をなして作用しているものであり、別々に切り離して観察することはできない。いかにも、形態上から、中期英語(Middle English)以降において、英語の格組織が崩壊し、特に名詞の与格と対格、さらにそれと主格の差別が失われるようになったことが、間接受動構文の発達を大きく促進させたといえる。代名詞ばかりでなく名詞や形容詞においても、主格・対格・与格の形態上の差異が保持されていた古期英語(Old English)では、今日のドイツ語などにおけると同様、一般に直接受動構文が用いられていた。しかし、ここで注意しておかなければならないことは、古期英語においても、直接受動構文の優勢な型は非論理的で、しばしば非人称構造(Impersonal construction)の特徴を呈するものであったという事実である。このことを引用によって例証する前に、まず、一般に古期英語の受動構文に認められる非人称的性格を注目しなければならない。

一体、受動構文の表現は論理的思考を反映させた形式ばった文体に適するものであり、素朴で直観的な文体を特徴とする古期英語では、受動構文が主語を含まないという非論理的様相を呈することがあった。

(1) Witodlice ðam ylcan dome ðe ge demap, eow biþ gedemed, and on

---

\* “Direct passive,” “Indirect passive” の名称は Krusinga, *A Handbook of Present-Day English* II. § 461 によるが、また、“Impersonal passive,” “Personal passive” の名で呼ばれることもある (cf. Söderlind, *Verb Syntax in John Dryden's Prose* II)。この名称は、後に述べるように、間接受動構文の発達が非人称構造から人称構造への推移に関連している点に鑑み、示唆的であるが、またそれだけ明確さを欠くものであるため、本稿では主題の名称としてはそれを避けることとした。

ðam ylcan gemete ðe ge metaþ, eow byþ gemeten.—A.-S. Gosp., *Matthew* vii.  
2.

(2) Soþlice ðam ðe hæfþ *him byþ geseald* and he hæfþ; …—*ibid.* xiii.  
12.

この古期英語による聖書の2節に該当する Wycliffe 訳は、それぞれ

(1') For in what dome *ze demen*, *ze shulen ben demyd*, and in what  
measure *ze meten*, *it shal be meten* to *zou*. (=For with what judgement you  
judge, you will be judged, and in what measure you measure, it will be  
measured to you.)

(2') For *it shal be zouen* to *hym* that hath, and he shal have plentee; …  
(=For it will be given to him who has, and he will have abundance.)

である。Anglo-Saxon 訳による(1)の *biþ gedemed*, *byþ gemeten*, (2)の *byþ geseald* という受動態に対して主格による主語が表現されていないのであるが、1389年刊行の Wycliffe 訳では、それぞれ *ze shulen ben demyd*, *it shal be meten*, *it shal be zouen* と、主語が明らかに表わされている。このうち、*eow byþ gemetan* > *it shal be meten to zou* と *him byþ geseald* > *it shal be zouen to hym* の推移では、Wycliffe 訳において、ものをさす主格の代名詞 *it* が表わされ、語順が変わっているというほかには、Anglo-Saxon 訳と Wycliffe 訳との間に各要素の形態と機能に変動がない。一般に Wycliffe 訳では、Anglo-Saxon 訳における与格は前置詞 *to* による迂言形によって忠実に写し出されている。

しかし、(1), (1') の前半に見られる *eow biþ gedemed* > *ze shulen ben demyd* の推移では、構造が非人称的から人称的に変動し、Anglo-Saxon 訳の与格 *eow* (> ModE *you*) が Wycliffe 訳で主格 *ze* (> ModE *ye*) に変えられている。この形態とそれに伴う統語上の構造の変遷は、古期英語において与格を支配していた動詞が中期英語の後期において、与格と対格の区別が失われるにつれて、対格を支配する一般の他動詞とみなされるようになったことに起因する。古期英語の *dēman* は 'judge' の意味では、普通、人をさす与格を従えて用いられた。<sup>\*\*</sup> 中期英語では、*dēmen* が一般

\* The Anglo-Saxon, or West-Saxon, Gospels の略。以下、引用する聖書の A.-S. 訳、Wycliffe 訳、および Tyndale 訳は、Bosworth & Waring, *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels with the Versions of Wycliffe and Tyndale* (3rd ed., London, 1888) による。

\*\* もっとも、Anglian 方言では同じ意味の *dēman* が対格を支配した。(1) に引用した West Saxon 訳の *eow biþ gedemed* は、Lindisfarne Gospels では *ge biðon gedoemed*, Rushworth Gospels では *ge beoþ doemde* となっていて、それぞれ主格の *ge* が受動態の前に用いられている (cf. OED, s. v. DEEM v. 1. 2)。また West Saxon 訳 (次ページ)

の他動詞なみに主格を主語とする受動態で用いられるようになったわけである。<sup>\*</sup>

古期英語の *eow biþ gedemed* や *eow byþ gemeten* という受動構文は、*dēman* し、また *metan* する行為者と、その行為を直接にこむる対象との相対関係を前提とすることのない、いわば端的に行為そのものを軸とし、それに加えて関与する人を表現した構造である。それは受動構文としては非論理的であると同時に、非人称構造の特徴を露呈したものである。古期英語の典型的な非人称動詞 *þyncan* (=seem) は、与格を添えて *him þuhte* (=it seemed to him) のように用いられるが、また非人称動詞そのものが受動態をなして、*wæs him geþuht* のように用いられることがある。<sup>\*\*</sup> ちょうど日本語の「…とかれには思われた」に相当する受動表現である。次に、その具体例を示そう。

(3) *mid gelæredre handa he swang þone top mid swa micelre swiftnesse þæt ðam cyngre wæs geþuht swilce he of ylde to iugūðe gewænd wære.*—*Apollonius of Tyre* XIII. (=He skilfully whipped the top with such swiftness that it seemed to the king as if he had been turned from age to youth.)

この *wæs geþuht* は、発生的には分析形式の中間態表現からの類推によるものと考えられるが、いずれにしても単純な *þuhte* に対する強意的な迂言形であり、論理的な行為者の概念から超絶し、統語上の主語の介在を必要としない、人の心的状態そのものに焦点を合わせた受動表現である。<sup>\*\*\*</sup> *ðam cyngre wæs geþuht* は非論理的受動

(↷) でも、次のように *dēman* の受動態が主語としての主格に伴っている例が見られる。*Nelle ge deman, and ge ne beoþ demede.*—*Luke* vi. 37. (= Don't judge, and you will not be judged.)/*forðam ðyses middaneardes ealdor ys gedemed.*—*John* xvi. 11. (=because the prince of this world has been judged.)

\* *dēman* よりもいっそう普通に人をさす与格を支配する古期英語の動詞に、*cwēman* (=please), *helpan* (=help), *þancian* (=thank), *bēodan* (=command, summon) などがあり、それらの動詞が中期英語において主格を伴う受動態で用いられるようになる過程は、van der Gaaf, "The Conversion of the Indirect Personal Object into the Subject of a Passive Construction" §§ 3—13 (*English Studies* XI (1929), pp. 2—7) に、克明に記述されている。特に、中期英語で一種の間投詞的慣用法となった *panked be God*, *panked be he* が *man þanke God*, *man þanke him* に直接に対応すべき受動構文ではない (§ 7) と述べているのは、この際示唆に富む注意である。

\*\* この統語法は、次のように、近代初期の Thomas More の英語にまで見られる。*it was thought vnto the protectour...that her keypyng of the Kinges brother...was the thing which...*—*The History of Kyng Richard the Third* 48 G 3 (1513) (q. Visser, *A Syntax of the English Language of St Thomas More* § 575).

\*\*\* ドイツ語の動作や状態の発生そのものを強調する次のような受動構文が(次ページ↷)

構文の端的な例と言えるが, *eow biþ gedemed*, *eow byþ gemeten* には, それと共通した性格が認められるのである。

古期英語から中期英語へかけての (a) *eow biþ gedemed* > *3e shulen ben demyd* と (b) *eow byþ gemeten* > *it shal be meten to 3ou* の推移は, 英語の統語史上における特徴のある二つの動向を象徴している。構造上では, (a) は古期英語の非人称構造を中期英語の人称構造に変動させており, (b) はそれを中期英語に継承させていると言える。しかし, 語順の上では, かえって (a) が「人の表現 + 述語動詞」の型を維持させており, 古期英語における非論理的受動構文の特徴を中期英語にまで持ち越させている。それに対し, (b) では, 非論理的な受動構文が論理的で直接的な受動構文に構成し直されているというべきである。古期英語の受動表現は非人称的で非論理的であるが, 中期英語以後では, 一方においては, 「人をさす主語 + 述語」という近代的な叙述様式に, 他方においては, ものの表現を主語とする受動構文という論理的な外形のもとに, それぞれ調整されている。上の (a) と (b) が二つの系列を代表するものとみなすならば, そのどちらを引き継ぐ表現法も, 文脈に沿って適宜に選ばれ, それなりの文体価値を発揮している。しかし一般的に言えば, (a) を引き継ぐ表現法が (b) を引き継ぐ表現法よりも, いっそう英語の口語的慣用法に適合しているものである。本稿の主題とする間接受動構文は, この (a) の系列に属する表現法であることはいうまでもない。上の引用例 (2) における *him byþ geseald* は, そのまま間接受動構文の原型をなす例であるが, これを含む聖書の個所が, さらに近代の訳書ではどのように表現されているかという問題は, 改めて後の章 VI で取り上げることとする。

### III

古期英語においては, 二重目的語を従える動詞の受動態は, 能動態における対格目的語を主格形による主語とするのが普通であった。ただし, その場合, 受動態の述語動詞に添えられる人をさす与格は, しばしば文頭または文頭に近い位置か, あるいは少なくとも主語である主格よりも前の位置に置かれることが多かった。直接受動構文におけるこの強調的語順が, 後の間接受動構文を惹き起こす重大な要因であり, ここ

---

(\) 比較される。Oben *wird getanzt*. (=There is dancing going on upstairs.) / Es *wird gelaufen*. (=There is running going on.) Cf. Curme, *op. cit.* p. 338.

で特に注意されるべきものである。

もっとも、古期英語にも、次のように、主語を文頭もしくは文頭に近い位置に表わしている直接受動構文の例は見受けられる。

(1) *sib is forgifen godes gelaðunge.*—Ælfric, *Lives of Saints* ix. 130—1.  
(=Peace is granted to God's congregation.)

(2) *ƿa wæs ærende æðelum cempa aboden in burgum,*…—*Andreas* 230—1.  
(=Then the message was announced to the noble warrior in the city.)

これらの文に見られる語順は、古期英語においても、一次的伝達にかなった正規な構造をなすものと考えられる。しかし実際には、直接受動構文は、もっとリズムの抑揚に富んだ端的な語順をなして現われるほうが普通のようなのである。

いま、Anglo-Saxon Gospels の *Matthew* 中に現われる直接受動構文を調べてみると、(1)「主語 + 与格目的語 + 述語動詞」が3個所 (vi. 33, xi. 27, xiii. 12), (2)「主語 + 助動詞 + 与格目的語 + 過去分詞」が1個所 (xxvi. 9)<sup>\*</sup>, (3)「助動詞 + 主語 + 与格目的語 + 過去分詞」が1個所 (xii. 32), (4)「主語 + 述語動詞 + 与格目的語」が2個所 (xii. 31, xxi. 43)<sup>\*\*</sup>, (5)「与格目的語 + 述語動詞 (+ 主語)」が11個所 (vii. 7 [2個所], ix. 5, x. 19, xii. 32, xiii. 11 [2個所], xiii. 12, xiv. 4, xxi. 43, xxviii. 18), (6)「助動詞 + 与格目的語 + 過去分詞 + 主語」が1個所 (xix. 13)<sup>\*\*\*</sup>, (7)「与格目的語 + 助動詞 + 主語 + 過去分詞」が2個所 (xii. 39, xviii. 24), (8)「与格目的語 + 関係詞 + 主語 + 述語動詞」が1個所 (xix. 11) となっている。都合、22個所のうち最多数を占める(5)は、上のIIの(2)に例示したもののよう、「与格目的語 + 述語動詞」のあとに

\* ただし、この xxvi. 9 は *ƿis mihte beon geseald to myclum wurpe, and þearfum geseald.* (=This might have been sold at a high price, and given to the poor.) となっていて、「与格目的語 + 過去分詞」に先立つ「主語 + 助動詞」は、先行する等位節から補われるものである。

\*\* xxi. 43 の問題の構造は、(5)に属する構造に連続して、*eow byþ ætbroden Godes rice, and byþ geseald ðære þeode ðe hys earnap.* (=The kingdom of God will be taken from you, and will be given to the people who deserve it.) となっており、「述語動詞 + 与格目的語」に先立つ主語は、先行の等位節で終位を占めている主語と共通なものと解釈した。なお、問題の構造で終位を占めている与格の語があとに関係詞節を伴っている点に注意される。

\*\*\* ただし、この xix. 13 では、*Ɗa wæron him gebrohte lytlingas to,*…(=Then some children were brought to him.) のように、節尾に前置詞 *to* が添えられ、前の与格 *him* の機能を分析的に補強している。あとの引用例(8)と比較されるべきである。

主格形の主語を表現していないもの (vii. 7 の 2 箇所, xii. 32, xiii. 11, xiii. 12, xvi. 4) や、不定詞句を伴うもの (xiii. 11) をも含んでいる。この構造では、多かれ少なかれ、主語は補足的表現として追加されていると解されるものであり、従って、前後の文脈上から主語となるべき概念が自明であるか、または論理上の主語として不定な概念しか意識されていない場合には、受動態のあとにことさらに主格が表現されないで済むようになるのである。このように考えれば、終位に主語を表現している構造とそれを表現していない構造とを、本質的には同じ範疇のものともみなすことが許されよう。上に (5) の型の表示で、「与格目的語 + 述語動詞」のあとに続く「+ 主語」をカッコに囲い、その中に主語の表現されていない例をも含めたのは、そのためである。

この (5) と (6), (7) は、与格目的語を端的に首位または首位に準ずる位置にすえている点で共通している。また、(8) は受動構造が従節内に現われているため、述語動詞が終位となっているものであるが、与格の語が関係詞の先行詞として前方のきわだった位置に表わされており、やはり (5) と共通性をもつ構造とみなされるべきである。それに対し、(1) は主格形の主語を首位に表現した、いわば論理的構造であり、(2), (3), (4) はその変型かまたは偶発的現象と解してよいものである。従って、大別して論理的な (1), (2), (3), (4) と強調的ないし非人称的な (5), (6), (7), (8) との二つの型を考えてみるのが可能である。いま、前者を A 型、後者を B 型と名づければ、A, B 両型の頻度数の比は 7:15 ということになる。文体的にも限られた英訳聖書の一部だけを資料とした調査の結果ではあるが、これによってほぼ B 型の優勢が察知されよう。

上にあげた例の (1), (2) は A 型に属するものであるが、なお、*Matthew* から A 型の引用例を一、二付け加えておく。

(3) *Ealle þing me synt gesealde fram minum fædyr,...*—xi. 27. (=All things are given me by my Father.)

(4) *ælc synn and bysmur-spræc byþ forgyfen mannum,...*—xii. 31. (=Every sin and blasphemy is forgiven to men.)

(3) は、受動態に行爲者を示す前置詞 *fram* による句が添えられていて、いかにも論理的発想を反映させている文であり、(4) は、各要素の配列の点で、全く近代英語の語順と変わりが無い。もっとも、与格目的語が *mannum* という名詞であることに注意すべきである。もしそれが代名詞であったならば、*...him byþ forgyfen* というような (3) におけると同じ語順になっているところと推定される。

次に、B型の例を引用しておく。

(5) *Biddaþ, and eow biþ geseald; seceap, and ge hit findaþ; encuciaþ, and eow biþ ontymed.*—vii. 7. (=Ask, and it will be given you; seek, and you will find it; knock, and it will be opened to you.)

(6) *And swa hwylc swa cwyþ word ongen mannes sunu, him byþ forgyfen; se ðe soþlice cwyþ ongen Haligne Gast, ne byþ hyt hym forgyfen, ne on ðisse worulde, ne on ðære toweardan.*—xii. 32. (=And whoever says a word against the son of man, will be forgiven; but the man who says against the Holy Ghost will not be forgiven it, either in this world or in the other world.)

(7) *eow is geseald to witanne heofena rices gerynu; and him nys na geseald.*—xiii. 11. (=It has been given you to know the mysteries of the kingdom of heaven; but to them it has not been given.)

(8) *And ða he ðæt gerad sette, him wæs an broht, se him sceolde tyn þusend punda.*—xviii. 24. (=And when he had begun to reckon, there was brought to him a man who owed him ten thousand talents.)

(9) *Ne underfoþ ealle menn ðis word; ac ðam ðe hyt geseald ys.*—xix. 11. (=Not everyone can accept this word; but only those to whom it has been given.)

このうち、(6)の第2文に見られる *ne byþ hyt hym forgyfen* は、A型の(3)に属する構造であるが、ここでは、否定語 *ne* に率いられて首位に出された定形動詞 *byþ* のあとを受けて、軽い調子で形式語の *hyt* (>ModE *it*) が配置され、構造上のリズムを整えているもののように思われる。それに対し、第1文における *hyt* の表現されていない *him byþ forgyfen* は本来の非人称的特徴を露呈した簡潔な表現である。これを含めて、上の引用例で首位を占めている人をさす与格の代名詞は、すべてそれぞれの文脈で端的な強勢を帯びさせられていることに注意すべきである。特に、(6)の第1文の *him* はそれに先行する *swa hwylc swa* に始まる不定関係詞節と同格的に用いられて、意味の脈絡を明瞭にしており、(7)の *eow* と *him* はたがいに対照的な位置に置かれて強調されている。(9)についてはすでに言及したが、関係詞 *ðe* の先行詞としての *ðam* (*þæm*) は与格複数形の指示代名詞である。それは意味上では第1文の *ealle menn* と対等に主格で表わされるべき要素であるが、統語上 *ðe* とともに、あとの関係詞節を導く決定詞として、節内における機能に応じた形態で表わされているものである。

統語上で注意されるのは、(7)の *eow is geseald to witanne*…という受動態に接する不定詞句の用法である。この文における *gesellan* は、*Anglo-Saxon Dict.*, Sup-

plement, p. 406 r. で “of the Deity, to grant, bestow a faculty, power, advantage, &c.” と定義している意味のもので、あとに不定詞を従える統語法もラテン語の dare の用法に準じたものと考えられる。ちなみに、(7) に該当するラテン語聖書<sup>\*</sup>の文は、

(7') *vobis datum est nosse mysteria regni coelorum: illis autem non est datum.*

となっており、Wycliffe 訳でも、

(7'') *to zou it is zouen for to knowe the mysterie of the kyngdam of heuenes; but it is nat zouen to hem.*

と、同じ構造が写されている。Wycliffe 訳では形式上の主語として it が用いられ、あとの不定詞をあらかじめ代表しているかのように見え、その不定詞がこの文の論理上の主語であることを裏書きしているように思われる。zouen を ‘granted’ の意味と考えれば、そのような解釈が成り立つわけである。しかし、このことを別にして、古期英語の *eow is geseald to witanne* という表現そのものに即して言えば、*to witanne* は *is geseald* に密着して、その意味を補足しており、述語として *is geseald to witanne* がひとまとまりの機能上の単位を構成しているように考えられる。その点、この表現法は近代英語の慣用的間接受動構文である *I am given to understand*<sup>\*\*</sup>… の類に通ずる統語的性格を帯びていると言える。近代における間接受動構文の発達を考え合わせるにつけ、古期英語の *eow is geseald to witanne*… は論理的主語をもたぬ非人称的文であり、むしろ冒頭の与格形 *eow* は *is geseald to witanne*… 全体を述語とする心理的主語であるという見解も是認されよう。

次になお、B 型の特徴を明らかにしている具体例を、Anglo-Saxon Gospels の他の部分から引いておく。

(10) *forgyfaþ, and eow byþ forgyfen. Syllaþ and eow byþ geseald.*—*Luke vi. 37—8.* (=Forgive, and you will be forgiven. Give, and it will be given

\* *Biblia Sacra Latina: Valgatæ Editiones Sixti V et Clementis VIII* (Bagster, London) による。

\*\* van der Gaaf (*op. cit.* § 34) によれば、この受動表現は 16 世紀半ば以後に発生したという。Cf. OED, s. v. GIVE 29 c.

\*\*\* ただし、Jespersen (*Modern Eng. Gram.* III. § 15. 3<sub>1</sub>) は、古期英語のこの *gesellan* に当たる *give* (cf. OED, s. v. GIVE 3) は、*I am given to understand*… のような間接受動構文には用いられないと注意している。VI の (18) に引用する N. E. B. の表現を参照されたい。

to you.)

(11) he æt ða offrung-hlafas, ðe him ne alyfede næron to etanne, buton sacerðum anum, …—*Mark* ii. 26. (=He ate the hallowed loaves which no one was allowed to eat, but the priests alone.)

(11) は問題の構造が関係詞節に現われているものであるが、受動態の述語動詞に接する不定詞 to etanne は、その意味の適応範囲を規定して、それに密着し、ひとつながりの非人称構造を形成していると解すべきであろう。

#### IV

古期英語に多い B 型の直接受動構文は中期英語にも持ち越されている。英語はやがて名詞における与格と主格・対格とが形態上で弁別できないものとなったが、与格の人称代名詞を首位とする構造が 14, 5 世紀まで、かなり根強く維持されているという事実は注目に値することである。われわれは III において古期英語の引用例で、B 型の構造で首位を占める与格の語が強調されていることを観察したが、一般に、論理的語順を超脱したこの一種の転倒の背後に、ものをさす論理上の主語の概念よりも叙述に関与する人の概念にいつそう多くの話し手の関心が寄せられるという心理的傾向が作用していると言える。Jespersen (*Modern Eng. Gram.* III. § 15. 24; *Chapters on Eng.* § 80) は、能動構文において「間接目的語 + 直接目的語」の語順が一般化している現象に対するのと同様に、直接受動構文から間接受動構文への推移に対しても、この人への関心という心理的要因を唱えている。しかし、III において観察した古期英語の例と、さらに次にあげる中期英語の例から判断して、この心理的傾向は、直接受動構文から間接受動構文への変動の生ずる時期よりもはるかに以前から、言語表現の上に強く反映されていることを知ることができる。確かにそれは変動の遠因をなしているということではできるが、直接の要因とするのは当を失しているように思われる。

中期英語における B 型の具体例をあげよう。

(1) Ðo þis child was boren, and him was name geuen þo com þe fader his speche.—*Old English Homilies* xxii (a. 1200). (=When this child was born and was given his name, the father came to his speech.)

(2) Swa ic wende wel þat þe sæze soð weoren, þe me wes to-niht itald bi an eorl swic-ful and bald.—*Lazamon* 3999—4000 (c. 1205). (=So I believed that the saying was true which was told me tonight about a bold and crafty earl.)

(3) *þe* *æ*ein *þeos* *twa* *ow* *beoð* *twafald* *blissen* *izarket*.—*Ancrene Wisse* 96 b. 21—2 (c. 1225). (=In reward for these two, twofold joys are prepared for you.)

(4) *þe* *first* *lagh* *was* *kald* ‘o *kind*,’ *þat* *es* *to* *sai*, *kindli* *to* *do*, *Al* *þat* *him* *was* *biden* *to*;…—*Cursor Mundi* 9430—2 (a. 1300). (=The first law was called “of nature,” that is to say, to do naturally all that he was commanded to do.)

(5) *Him* *was* *not* *geue* *so* *mikel* *plas*, *War-on* *he* *miȝt* *dee* *fayre*,…—*ibid.* 16762/118—9. (=He was not allowed so much place where he could die easily.)

(6) *I* *worsshipide* *boþe*, *and* *tolde* *hire* *þe* *toknes* *þat* *me* *ytauȝt* *were*.—*Piers Plowman* A XI 171—2. (a. 1370). (=I bowed to them both and told them the tokens that I had been taught.)

(7) *Joseph*…*gouernede* *þe* *house* *taken* *to* *hym*: & *all* *þingeȝ* *þat* *to* *hym* *wern* *betauȝt*.—Wycliffe, *Genesis* xxxix. 4 (c. 1382). (=Joseph governed the house entrusted to him, and all the things that had been delivered to him.)

(8) *But* *me* *was* *told*…*That* *by* *the* *same* *ensample* *taughte* *he* *me* *That* *I* *ne* *sholde* *wedded* *be* *but* *ones*.—Chaucer, *C. T.*, “The Wife of Bath’s Tale,” D 9—13 (c. 1386). (=But I was told that he, *i. e.* Christ, taught me by the same example that I should not have married more than once.)

(9) *For* *blood* *bitokenes* *gold*, *as* *me* *was* *taught*.—*ibid.* 581. (=For blood betokens gold, as I was taught.)

このうち、特に(9)が *was taught* という受動態に対する具体的な主語を表現しておらず、非人称構造の特徴を明らかにしている。また、(2), (4), (6), (7)では、問題の構造がいずれも *þat* (>*that*) または *þe* に導かれる関係詞節内に用いられ、もともと主語を顕示しない統語的環境の中であって、やはり非人称的性格を暗示している。B型の直接受動構造はこの種の関係詞節に適合し、そのわくによって支

\* この末尾の *to* は、7 ページの脚注\*\*\*にあげた A.-S. *Gosp.*, *Matt.* xix. 13 におけるものや、(7)におけるもののように、与格関係を分析的に示す *to* ではなく、次に *do* が補われうる “Pro-infinitive” と見られる (cf. OED, s. v. *To* B 21)。

\*\* この *take* は今日廃用となっている “to give in charge, commit, entrust” の意味で、中期英語で *betake*, *beteach* に代わって用いられた。対格と与格または *to*-phrase を伴う点で、この例の *þe house taken to hym* も、凝縮した直接受動構造とみなされるべきものである (cf. OED, s. v. *TAKE* v. 60)。

\*\*\* *The Canterbury Tales* の略。なお、Chaucer からの引用は Baugh, *Chaucer’s Major Poetry* (N. Y., 1963) による。

えられているとも考えられる。さらに、(8)の *me was toold* に続く *that*-clause は論理的には主語とみなすことができるが、本来、*was toold* に対する一種の副詞的補語として追加されている要素であることは、IIIの(7)の *eow is geseald to witanne*…における不定詞句の場合と同じである。その点、*Me was toold that*…という伝統的構造は、後の新しい *I was told that*…という間接受動構文にきわめて自然に推移すべき潜在性を備えたものである。

(7)の Wycliffe の例では、首位を占める与格の代名詞が *to hym* という前置詞による分析形で表現されている。Wycliffe 訳の聖書では、ラテン語訳聖書における与格が多くの場合 *to*-phrase で写されているが<sup>\*</sup>、この個所は、その句が首位に置かれて B 型をなしている、むしろ珍しい例である。後にも述べるように、Wycliffe 訳では、人をさす与格が *to* による分析形で表わされると同時に、それが受動態の述語動詞のあとに置かれて、A 型の直接受動構文を固定させようとする傾向が見られる。

上にあげた例は、古期英語における B 型を維持しているものであるが、その非人称的特徴の濃い表現では、しばしば形式上の代名詞 *hit* (*it*) を首位に立てて、与格は受動態の述語動詞のあとに表わすという構造が、中期英語に多くなってきている。それは B 型の実質を A 型の外形に調整させようとした現象と言えるものである。次に、そのような形式の構造の見られる引用例をあげよう。

(10) *þe chyldren of yrael dydden as it was beden to hem.*<sup>\*\*</sup>—Wycliffe, *Genesis* xlv. 21. (=The children of Israel did as they were commanded.)

(11) *It is told me* sithen that the seyd John Wortes is in the cite of Rome, …—*Paston Letters*, No. 5 (1425). (=It is told me then that the same John Worts is in the city of Rome.)

(12) *hit was tolde me* there were passyng good knyghtes; …—*The Works of Sir Thomas Malory* (ed. Vinaver) p. 45 (1469). (=I was told that there were very good knights.)

(11)におけるような *It is told me that*…は、現代英語では古風な構造とみなされ、*I am told that*…に代えられている。このように、*It is told me that*…という非人称的直接受動構文は、*I am told that*…という人称の間接受動構文に推移したのであるが、前者はさらに(8)におけるような *Me is told that*…にさかのぼるべき

\* ちなみに、(7)に引用した *Gen.* xxxix. 4 に該当するラテン語訳を記しておく。Joseph …gubernabat creditam sibi domum, et universa quæ ei tradita fuerant.

\*\* この個所に該当するラテン語訳は次のようになっている。Fecerunt filii Israel ut eis *mandatum fuerat*. eis は ii (=they) の与格。

ものである。この (a) *Me is told that...* > (b) *It is told me that...* > (c) *I am told that...* において、(a) の統語関係が (b) に維持され、それが (c) において変動されているけれども、語順とそれに反映される意味上の比重の点では、むしろ (c) が (a) に直結すべきものである。

上の (10) における *it was beden to me* のような “it + 受動態 + *to*-phrase” は、Wycliffe 訳の聖書の統語法を特徴づけている形式である。そのことは、III にあげた Anglo-Saxon Gospels の *Matthew* からの引用例を、それに該当する Wycliffe 訳と比較してみるとき明らかになる。Anglo-Saxon Gospels における B 型で、不定詞句を伴っていたり、主格形の主語を表現していなかったりする vii. 7 (2 個所), xii. 32, xiii. 11 (2 個所), xiii. 12, xvi. 4 のうち、xiii. 11 と xiii. 12 に該当する Wycliffe 訳は、すでに III の (7'') と II の (2') にあげておいた通りである。その他の個所も、xvi. 4 以外のものはみな、Wycliffe 訳では次のように “it + 受動態 + *to*-phrase” の構造によっている。

(13) *Axe 3e, and it shal be zouen to you; seke 3e, and 3e shulen fynde; knocke 3e, and it shal be opnyd to zou.* — Wycliffe, *Matthew* vii. 7 (cf. III (5)).

(14) *And who euere shal seie a word azeins mannys sone, it shal be forzouen to hym; forsothe he that shall seye a word azeins the Holy Goost, it shal nat be forzouen to hym, nether in this world, ne in the tother.* — *ibid.* xii. 32 (cf. III (6)).

さらに、III の (10) にあげた Anglo-Saxon Gospels の *Luke* vi. 37—8 に該当する Wycliffe 訳も、やはり

(15) *forzyue 3e, and it schal be forzouun to zou. 3yue 3e, and it schal be zouun to zou.*

となっている。

いま、(13) の *it shal be zouen to you* を III の (5) の *eow biþ geseald* と比較してみると、古期英語の統語法を象徴する後者におけるような、行動に関与する人の概念を端的に強調する点は、中期英語の統語法を象徴する前者に認められない。その代わりに、そういう人の概念を分析形式によっていっそう明晰に表現しているとい

\* Anglo-Saxon Gospels と Wycliffe 訳における *Matthew* xvi. 4 は、それぞれ次のようになっている。A.-S. Gosp.: *hyre ne byþ geseald, buton Jonas tacen, ðæs witegan./* Wycliffe: *a tokene shal nat be zouen to it, no but the tokne of Jonas, the prophete.* (=No token will be given to them, but the token of the prophet Jonas.)

うのが、Wycliffe の統語法における論理的直接受動構文の特徴と言えよう。

この *it* を受動態の述語動詞の前に形式上の主語としてする構造は、論理的根拠に基づくものであるが、また同じ首位に副詞を表わす次のような表現法も見られる。

(16) *Ther lasse spekyng hadde ynough suffised, Comth muchel harm; thus was me toold and taught.*—Chaucer, *C. T.*, “The Manciple’s Tale,” H 336—7. (=Where less speech would have been enough, there comes much harm; so I was told and taught.)

(17) *So in the meanewhyle com Merlyon unto the courte of kyng Arthure, and anone was tolde hym the adventure of the swerde and the deth of the Lady of the Lake.*—*The Works of Sir Thomas Malory*, p. 50. (=So in the meanwhile there came Merlion to the court of King Arthur, and immediately he was told the adventure of the sword and the death of the Lady of the Lake.)

(17) では、具体的概念をさす主語の *the adventure of…* は末尾に置かれているが、(16) では、*was toold and taught* の論理的主語は先行する陳述全体から補われるべきであり、それを受ける副詞の *thus* は、形式上の主語として用いられる *it* と類似した機能を果たしていると言える。いずれにしても、これらの例における *thus* や *anone* は、語順の上で B 型の構造において首位を占めるべき与格の語に対応し、問題の受動構文を導入する働きを勤めている点で、上に述べた “*it* + 受動態 + 与格(句)” における *it* と共通した性格のものである。

以上は、中期英語における直接受動構文を、B 型に焦点を置いて観察してきたものであるが、無論、具体物をさす主語に始まる A 型は、中期英語において論理的な「主語 + 述語動詞 + 付加要素」の語順が確立してゆくにつれて、ますます多く用いられるようになっていっている。それは、しばしば「主語 + 受動態 + 与格(句)」という近代的語順によって、論理的態勢を整備している。ふたたび Wycliffe 訳聖書の *Matthew* からの引用を例として言えば、単に Anglo-Saxon 訳における A 型ばかりでなく、B 型のうちで主格形による主語を含む形式のものも、Wycliffe 訳では、「主語 + 受動態 + 与格句」の語順による A 型で表わされるようになっている。

(18) *al synne and blasfemye shal be forzouen to men,...*—Wycliffe, *Matthew* xii. 31 (cf. III (4)).

(19) *All power is zouun to me, in heuene and in earthe.*—*ibid.* xxviii. 18. (=All power has been given me, both in heaven and on earth.)

(18) は III の (4) にあげた Anglo-Saxon 訳での A 型に対応しているが、(19) に該当する Anglo-Saxon 訳は、

(19') *Me is geseald ælc anweald, on heofonan and on eorþan.*

と、B 型をなすものである。

## V

かりに、IVの(5)に引用した中期英語のB型の構文 *Him was not geue so mikel plas.* において、文頭に人称代名詞の *him* ではなく、名詞を表現する場合を考えてみよう。すでに名詞の与格語尾 *-e* が脱落していた14世紀の北部方言の文献である *Cursor Mundi* では、この文は *Our lord was not geue so mikel plas.* と表現されたと推定される<sup>\*</sup>。この場合、本来与格形としての *lord* も、述語動詞に先立つこの位置では、それに対する主語であると解釈されるようになるのが自然であろう。このような現象が契機となって、同種の構文において受動態の述語動詞に先立つ通格形の名詞が主語であるという意識が醸成され、ひいては、人の表現に人称代名詞を用いようとする場合でも、それを同じ位置に主格形で表わすようになるとは、容易に想像されうることである。つまり、*Him was not geue so mikel plas.* > *Our lord was not geue so mikel plas.* > *He was not geue so mikel plas.* (=He was not given so much place.) の過程をたどって、今日の間接受動構文が発達したと考えられる。

現に、変遷の原動力をなす通格の名詞が主語として受動態に先立っている具体例は、次のように、14世紀初めの文献からあげることができる。

(1) *The Duke Mylon was given hys lyff, And fleygh out of land with hys wyff.*—*Richard Coer de Lyon* 1307—8 (c. 1300) (q. van der Gaaf). (=The Duke Milon was given his life and fled out of the land with his wife.)

この例では、冒頭の *the Duke Mylon* は、あとの等位節における述語動詞 *fleygh* に対し共通的に主語としての関係にあり、当然、すぐあとの *was geven* に対しても主語とみなされるべきものである。従って、*was geven* のあとの *hys lyff* は保留された、本来、対格の目的語ということになるが、実際の作者の意識では *hys lyff* は

---

\* もっとも、*Cursor Mundi* のこの引用個所にすぐ先立つ部分が、*till our lord in erth so mikel was not leued, Whar on pat he miȝt rest on is very heued.*—16762/114—7. (=Not so much was left for our lord on earth, where he could rest his wearied head.) となっていて、文頭の *till* (=to) *our lord* が与格相当の前置詞付きの句で表現されている。

was geven に密着して, was geven hys lyff でひとまとまりの述語を構成していたものと解されるのである。伝統文法で, The duke was given *his life*. における his life は保留目的語 (Retained object) と呼ばれているが, その名称は実態を表わすのに不適當なものと言わなければならない。

受動態の直後に接する, ものをさす名詞表現がその動詞表現と複合的要素を構成している点が, いっそう端的に認められるのは, 次のような現象においてである。

(2) licunge wið innen, as sum fals gleadschipe, oðer of monne hereword, oðer zef me <sup>\*</sup>is iluuet mare þen an oþer, mare iolhnet, mare idon god oðer menske.—*Anerene Wisse* 48 b. 1—5. (=Pleasing within, as some false joy, either from the praise of men, or if one is more beloved, more flattered, or done more good or honour, than another.)

(3) I fand Ihesu bownden, scourgede, *Gyffen galle* to drynke, naylede to þe Crosse, hyngande in þe Crosse and dyeand in þe Crosse.—Richard Rolle of Hampole, *Prose Treatises* 1 (a. 1349). (=I found Jesus bound, scourged, given gall to drink, nailed to the Cross, hanging and dying on it.)

(2) の idon god oðer menske は, 先行する文脈における is iluuet…iolhnet に続いて用いられたもので, iluuet, iolhnet という2個の過去分詞に対等な位置にあるのは idon だけではなく, idon god oðer menske という連語全体であるとみなされる。<sup>\*\*</sup>また, (3) の gyffen galle to drynke は I fand Ihesu に続いて目的叙述語としての機能を果たしており, gyffen という過去分詞は目的語の Ihesu に対し, 受動関係の叙述語であり, Ihesu gyffen galle で収縮した間接受動構造をなすものである。しかし, ここでも gyffen galle to drynke はまとまって, その前にある bownden, scourgede という過去分詞や, あとの naylede to þe Crosse という分詞句と対等な単位としての機能を果たしており, galle には対格の保留目的語という自立性が感ぜられない。

この「受動態 + ものの表現」の主語として, 人をさす主格形の人称代名詞が用いられるようになって, 間接受動構文が形式上で完成したと言えるのであるが, その形

\* 古期英語の man (=G *man*, cf. F *on*) に由来する主格の不定代名詞。

\*\* ちなみに, *Anerene Wisse* のこの個所に該当するラテン語版では, …si quis plus alio diligatur, plus honoretur, amplius bonum recipiat. となっていて, diligatur, honoretur という二つの受動態に対し, amplius bonum recipiat (=receives more good) だけが能動構造で表わされている。

式においても、もっとも早い例の一種とみなされる 13 世紀初めの現象は、次のように、「受動態 + ものの表現」が緊密な意味上の単位をなすものであることに注意される。

(4) *pa cnihtes scullen suggen...pat þu ært ilete blod and restest þe on bædde.*—*Lazamon* 9470—1. (=The knights shall say that you have been bled and are resting on bed.)

(5) *Opre...hudeð ham hwen ha beoð ilete blod on an earm eðre.*—*Ancrene Wisse* 70 b. 4—6. (=Other men hide themselves when they have been bled on the vein of an arm.)

今日この let blood の意味も統語法も古風なものとなっているが<sup>\*</sup>、その余喘が複合語の bloodletting という固定した形式に留められているという点を見ても、中期英語における lēten blōd の慣用的結合力の固さが察知されよう<sup>\*\*</sup>。þu ært ilete blod. のような特殊な表現法を、そのまま今日における一般の間接受動構文の源と見ることができないが、少なくともこれを、B 型の直接受動構文の統語的性格を引き継ぐ間接受動構文の本質が具現化された、一つの歴史上の現象とみなすことは許されよう<sup>\*\*\*</sup>。

次に、主格形の人称代名詞を主語とする、もっと一般的な間接受動構文の例をあげよう。

(6) *ye shulle for-yeuyn by your sake The holy gostes yeft to take.*—*Cursor Mundi* (Fairfax MS.) 19019—20 (a. 1400). (=You will be forgiven your sin by taking the gift of the Holy Ghost.)

(7) *All my shepe ar gone, I am not left oone,...*—*Towneley Plays* XII. 24—5 (c. 1450). (=All my sheep are gone; I have none left.)

(8) *Ryche ne poore, yong ne old, Sych an othere, as I am told, In all thys warld is none.*—*ibid.* IX. 34—6. (=Rich or poor, young or old, such another is not to be found, as I am told, in all this world.)

(9) *I wolde besech yow that ye wolde vouchesafe lat my saide son hafe*

\* Cf. OED, s. v. BLOOD n. 1 d.

\*\* 現に、*Ancrene Wisse* 中に、次のような複合語としての現象が見られる。pe uttre riwle...of doddunge & of blodletunge.—4 b. 9—14 (=the external rule of shaving and of bloodletting) / Swinkinde & blodletene.—71 a. 20 (=labouring and having been bled).

\*\*\* 近代英語において let blood の受動態を用いた例としては、次のものがあげられる。His ancient Knot of dangerous Aduersaries To morrow are let blood at Pomfret Castle, ...—Shakespeare, *Richard the Third* III. i. 182—3. (かれの物騒な旧反対党どもにはあすポンフレット城内で放血の療治を施すことになっている。)

the saide lifelode to ferme for terme of your life, paying to yow therefore yerely CC. marc..., and ye schall be paid hit truly at London,...—*Paston Letters*, No. 262 (1455). (=I should beseech you that you would kindly let my son have the livelihood of farming during the term of your life, paying you 200 marks yearly for it, and you shall surely be paid it in London.)

(10) *I am profgyrd* a maryage in London,...—*ibid.*, No. 739 (1474). (=I have been offered a marriage in London.)

(11) *I was promysyd* venyson a geyn my fest of my Lady Harcourt,...—*ibid.*, No. 831 (1479). (=I was promised venison for my feast by my Lady Harcourt.)

このうち、注意すべきなのは(6)の *Cursor Mundi* からの引用例である。*Cursor Mundi* の四つの写本のうち、ここに引いた Fairfax MS. とともに、Göttingen MS., Trinity MS. はいずれも、新しい構造によって主格の *ye* (3e) を用いているのであるが、もっとも古い 1300 年ごろの作といわれる Cotton MS. では、“*Yow sál forgiuen be yur sake*,...” と、古い B 型の直接受動構文によって、与格の *yow* が用いられている。ここに、古い構文において、首位を占めた人をさす与格が心理的にはむしろ主語と意識されたものであり、それがやがて文法形態によって顕現化されて行く過程を見ることが出来る。この推移に伴う、ものをさす *yur sake* (your sake) の機能の変動は必然的であり、主語から保留目的語へという移動は、単に結果的に意識されるだけのものに過ぎない。

(8) の *as I am told* は、原型として *as me is told* (cf. IV (8), (9)) という非人称的構造が考えられるべきものである。そして、この *as me is told* > *as I am told* の推移が、ちょうど、15 世紀の半ばに生じた *as me pinkep* > *as I think* \*\* の変遷によって象徴される非人称構造から人称構造への推移に平行している。

(11) は、受動の観念に対する行為者を *of* (=by) 以下の句によって表現している例であるが、この文に対応する能動構文として、*My Lady Harcourt promysyd me*

\* H. Marchand (“The Syntactical Change from Inflectional to Word Order System and Some Effects of This Change on the Relation ‘Verb/Object’ in English,” *Anglia* LXX. i, 1951) は、この過程についての見解を極端に押し進めて、*He was forgiven his sin.* という異常現象のほうがさきに存在していて、それを書記上で訂正した形が *Him was forgiven his sin.* であり、後者が文献上に頻出するのは一種の統語的症狀の徴候 (the symptom of a syntactic disease) にほかならないと言う (*op. cit.*, p. 79 f.).

\*\* Cf. van der Gaaf, *The Transition from the Impersonal to the Personal Construction in Middle English* §§ 116, 117.

venyson…が引き出される。しかし、この場合、能動と受動との対応は、promysyd 対 was promysyd を軸にしているのではなく、promysyd venyson 対 was promysyd venyson を軸にして現われていると考えるべきである。

## VI

前章で観察したところから、間接受動構文は、14 世紀に発達の萌しを見せ、ほぼ 15 世紀に完成したと結論を下すことができよう。近代英語 (Modern English) には、「主語 + 述語動詞 + 付加要素」の語順がますますその安定度を高めてくるにつれ、人を主語とする叙述様式としての間接受動構文もいっそう普及し、16 世紀末には、大体今日の標準語法における状態と同じくらいにまで用いられるようになったと見てよい。

以上は、新構文発達の観点から下した一般的な断定であるが、それとは別に、ここではまず、伝統的な B 型の直接受動構文が近代英語の統語法に残存している現状に注意してみたい。それは現代英語 (Present-day English) の散文体では古風な雅趣を帯びるものであるが、それだけまた、英語の統語法における潜在的特徴を端的に露呈した強意的表現法として注意されるべき現象である。

(1) *if there were offred him al the kingdomes of the worlde.*—Th. More, *The Lyfe of John Picus* 18 D 4 (c. 1510) (q. Visser).

(世界中の王国がかれに呈上されたなら……。)

(2) *There were shewed vnto hym manye thynges.*—Id., *A Dialogue Concerning Heresies* 272 B 14 (1528) (q. Visser).

(かれに多くのものが示された。)

(3) *least I should bee exalted aboue measure through the abundance of the reuelations, there was given to me a thorne in the flesh, a messenger of Sathan to buffet me,...*—A. V., *II. Corinthians* xii. 7 (1611).

(われはわが被りたる黙示の鴻大なるによりて高ぶることのなからんために肉体

\* Cf. Poutsma, *Gram. of Late Modern Eng.* XLVII. § 33; Söderlind, *op. cit.* § 17.

\*\* The Authorized Version の略。なお、A. V. からの引用は *The Authorised Version of the English Bible 1611* (ed. W. A. Wright, Cambridge, 1909) による。なお、この 2 Cor. xii. 7 は N. E. B. では、次のように、間接受動構文を用いた文となっている。to keep me from being unduly elated by the magnificence of such revelations, *I was given a sharp pain in my body which came as Satan's messenger to bruise me;*...

に一つの刺を与えらる、すなわちわれを打つサタンの使いなり。)

(4) *to whatsoever Man, or Assembly of Men, shall be given by the major part, the Right to Present the Person of them all, every one shall Authorise all the Actions and Judgements, of that Man, or Assembly of men, — Th. Hobbes, Leviathan xviii (1651).*

(どのような人または人々の合議体が、大多数の人々から全体の人格を代表すべき権利を与えられようとも、すべての人は、その人または人々の合議体の行動と判断をみな権威あるものと認めるべきである。)

(5) *A maiden knight — to me is given Such hope, I know not fear ; — A. Tennyson, Sir Galahad vi (1842).*

(純潔な騎士として、わたしには恐れを知らぬ希望が授かっている。)

(6) *To her had not been denied the gift of beauty. — Charlotte Brontë, Shirley vi (1849).*

(彼女には美人としての資質が恵まれていないということがなかった。)

(7) *To the first, there is shown but a very small field of experience, and taught a very trenchant principle for judgment and action ; — R. L. Stevenson, Virginibus Puerisque II (1881).*

(前者にはきわめて狭い範囲の経験しか示されておらず、判断と行動に対する基本もきわめて厳格なものが教えられている。)

(8) *Ah ! but to the night had been given that pale-gold moon-ray, to herself nothing, no faintest gleam ; — J. Galsworthy, The Dark Flower II. xvii (1913).*

(ああしかし、夜にはあの薄黄金色の月光が照らされているけれども、かの女自身には何一つ——ひと筋の微光すらも——当てられていなかった。)

(9) *To the marquises might safely be left the production of that part of literature which is known as belles lettres. — S. Maugham, Cakes and Ale xiv (1930).*

(侯爵たちには美文学と称する文学分野の制作をまかせておいて間違いあるまい。)

(1), (2), (3) では、文頭または節頭に、人をさす与格(句)の代わりに、形式的導入語の *there*<sup>1</sup> がすえられているが、この配語法は、中期英語の現象としてIVの(16), (17)に引用した *thus* や *anone* の副詞に導かれる構造と同範疇のものであり、非人称的構文の特徴を提示した形式として注意される。(7)は、本来の与格

句で始まる B 型の形式と形式語の *there* で始まる形式とが併用されているもので、卓立的強調と落ち着いた説明的口調とが程よく織りなされた均斉のある文となっている。この (7) を含めて、その他の引用例はすべて、動作に関与する人または人になぞらえられうる対象の概念が、それぞれの文脈で前方と照応し、あるいは後方と対照的に、強調されており、生き生きしたリズムを醸し出している。これらの現象が問題の間接受動構文と密接に関連するものであることは、たとえば、(8) の *to the night had been given*…から冒頭の前置詞 *to* を除けば、そのまま *The night had been given*…という平板な調子の間接受動構文が出現することを見ても明らかであろう。それは、いわば今日の間接受動構文に潜在する起原の様相が、きびきびしたリズムをたたえて、近代英語の文体に発露したものである。

上の表現法に関連して、IVの(10) — (15) に例示した “*It is told me that*…” 型の非人稱的直接受動構文について、なおここで言及しておきたい。それは、現代英語では一般に “*I am told that*…” 型の人稱的間接受動構文に取って代わられているが、16, 7 世紀の作品には、次のように、存続している姿が見受けられる。

(10) then *was it asked hym* <sup>\*\*</sup>whither a man must…have charite therwith.  
—Th. More, *A Dialogue Concerning Heresies* 264 A 2 (q. Visser).

(それからかれは人間はさらに慈愛の心をもたねばならぬのかと尋ねられた。)

(11) *it was tolde Solomon*, saying, Behold, Adoniah feareth King Solomon :  
…—A. V., *I. Kings* i. 51.

(ある人ソロモンに告げて言う、アドニアはソロモン王を恐ると。)

(12) *It being forbidden him* in the rebellious times to act tragedies and comedies…he was forced to turn his thoughts another way.—J. Dryden, *Of Heroic Plays* 19 (1670) (q. Söderlind).

(物情騒然とした時代で悲劇や喜劇を上演することが禁ぜられていたので、かれ

\* 現代作家の文章に見られるこの種の構文の一例をあげる。The Countess having shuddered at it and resumed her biscuit, *it was left to me* to make the opening excavation.—A. A. Milne, *If I May*. (伯爵夫人が恐れをなしたビスケットをかじり出したので、その掘り込みの皮切りをわたしがせざるを得なくなった。) ここでは、*I was left to make*…とあった場合の *I* にくらべ、*to me* により多くの対照上の強調が感ぜられる。

\*\* 発生的に古期英語の *āscian* は、*læran* (=teach; cf. G *lehren*) とともに、普通、人をさす対格目的語を従える動詞であることを考えれば、この例はいっそう注意を引く現象と思われる。記述的統語法の観点から、この *ask* が *tell* などと同範疇の動詞と意識されていることは言うまでもない。

も注意をほかの方面に向けないわけにはゆかなかった。)

(13) *so shalt thou see the gate; at which, when thou knockest, it shall be told thee what thou shalt do.*—J. Bunyan, *The Pilgrim's Progress* (World Classics, p. 11) (1678).

(そうすればその門が見え、それをたたけば、どうすればよいか教えられる。)

これらの例に見られる受動構造は、論理的形式を整えているにもかかわらず、現代英語で一般に慣用化している構文であるとは言えない。今日、普通には、itの代わりに人をさす代名詞や名詞を具体的な主語として冒頭に表わす人称的構文がそれに代わっている。特に、(12)における直接受動構文に対応する間接受動構文の *He had been forbidden to act...* では、受動態とあとに接する不定詞句とが意味上でも融合して、慣用的な連鎖形式の述語を構成しうるのである。なお、(13)に引用した *The Pilgrim's Progress* にはまた、“I am told that...”型の構造も見られる。その例は下の(27)にあげる。

すでに(3)と(11)に引用したように、Authorized Version (略 A. V.)には、Wycliffe 訳聖書におけると同様な非人称的 direct passive 構文が維持されている。さらに注意されることは、そのことは、A. V. よりも古い 1526 年の Tyndale 訳については無論であるが、新しい 1881 年の Revised Version (略 R. V.) や 1946 年の Revised Standard Version (略 R. S. V.) についても言えるということである。それは、聖書の英語の統語法は、より古い訳書におけるものに捕らわれやすく、またラテン語やギリシア語の原典における統語法に準拠し、それに制約されがちであるため、自然、同じ時期における普通の散文体のもよりも弾力性に欠け、保守的な傾向を帯びるという事実と併せられる。前にⅢで、Anglo-Saxon Gospels の *Matthew* に direct passive 構文が 22 箇所あることを述べたが、それがことごとく Tyndale 訳、A. V., R. V., R. S. V. にまで持ち越されている。さすがに、最新の 1961 年刊行の *The New English Bible* (略 N. E. B.) では、5 箇所 (vii. 7, xii. 32, xiii. 12 の後半部) が違った構文に変わり、下にあげる xiii. 12 の前半の 1 箇所だけ、間接受動構文に移っている。

まず、Anglo-Saxon 訳のもので、近代の訳書ではもっとも間接受動構文に変わって、いそうに期待される非人称構文の B 型を含んでいる xiii. 11 を、Tyndale 訳、A. V., R. V., R. S. V., N. E. B. によって、対照的に並記しておく。Ⅲの(7)と(7'')にあげた Anglo-Saxon 訳と Wycliffe 訳を比較されたい。

(14) Tyndale: *Hit is geven vnto you to knowe the secrettes off the kyngdom of heven; but to them it is not geven.*

(15) A. V.: *Because it is giuen vnto you to know the mysteries of the kingdome of heauen, but to them it is not giuen.*

(16) R. V.: *Unto you it is given to know the mysteries of the kingdom of heaven, but to them it is not given.*

(17) R. S. V.: *To you it has been given to know the secrets of the kingdom of heaven, but to them it has not been given.*

(18) N. E. B.: *It has been granted to you to know the secrets of the kingdom of Heaven; but to those others it has not been granted.*

これは、各訳書を通じて非人称的直接受動構文が維持されている例であるが、次に、古い訳書で用いられていた直接受動構文が N. E. B. で間接受動構文に変えられている xiii. 12 の前半部を記してみる。II の (2) と (21) にあげた Anglo-Saxon 訳と Wycliffe 訳を比較されたい。

(19) Tyndale: *For whosumever hath to him shall hit be geven, and he shall have abundance;...*

(20) A. V.: *For whosoeuer hath, to him shall be giuen, and he shall haue more abundance;...*

(21) R. V.: *For whosoever hath, to him shall be given, and he shall have abundance;...*

(22) R. S. V.: *For to him who has will more be given, and he will have abundance;...*

(23) N. E. B.: *For the man who has will be given more, till he has enough to spare;...*

注意すべき点は、同じ直接受動構文でも、Wycliffe 訳と Tyndale 訳は形式上の主語として *it* (*hit*) を用い、R. S. V. は不定代名詞の *more* を主語として表現しているのに対し、A. V. と R. V. は、全然、主語を表わしていないことである。A. V. の *to him shall be giuen* は、むしろ Anglo-Saxon 訳の *him byþ geseald* に直結する非人称構造の特徴を露呈したものであり、A. V. の文体の古雅な格調を統語法の上に示した一例<sup>\*</sup>と言える。

\* もっとも、実際には A. V. の *whosoeuer hath, to him shall be giuen* は、ギリシア語聖書の *δοσις...εχει, δοθησεται αυτω* を忠実に訳し出した結果と考えられる (cf. ラテン語訳: *Qui... habet, dabitur ei*)。なお、ドイツ語聖書 (Luther 訳) でも、この個所は *wer...hat, dem wird gegeben* と、同じ構造となっているが、フランス語聖書では *on donnera à celui qui a* となっていて、不定代名詞 *on* を主語とする能動構文で表現されている。

また、Ⅲの(11)に引用した *Mark ii. 26* の非人称的直接受動構造 *ðe him ne alyfede næron to etanne* は、Wycliffe 訳 (the whiche it was nat leeful to ete), Tyndale 訳 (which is not lawfull...to eate), A. V. (which is not lawfull to eate), R. V. (which it is not lawful to eat), R. S. V. (which it is not lawful ... to eat) のいずれも、叙述形容詞を用いた構造となっているが、N. E. B. では、

(24) He...ate the consecrated loaves, though *no one* but a priest *is allowed* to eat them,...

と、人称の間接受動構造に変わっている。これは、(10) — (13) で観察した構造に対する、新しい英語の統語法を特徴づける構造であり、「受動態 + to 不定詞」の慣用的融合性を物語る現象である。この構造は、受動態の適用範囲が論理的に規制されているフランス語では許容されていないものである。上に引用した *Mark ii. 26* が、フランス語聖書<sup>\*</sup>では、

(24') il...mangea les pains de proposition, qu'il n'est permis qu'aux sacrificateurs de manger,...

という、il (=it) を形式上の主語とした非人称的受動構造で表わされていることを参照するとき、英語の叙述様式に見られる統語的性能の特異な発展性を知ることができよう。

次に、新しい間接受動構文の具体例として、近代英語の各時期を代表すると思われるものだけをいくらか選んで示すこととする。

(25) *he could neuer after...be forgeuen his synne.*—Th. More, *The Confutation of Tindales Answere* 602 G 5 (1533) (q. Visser).

(かれはその後二度と罪を許されることができないであろう。)

(26) *Glamys thou art, and Cawdor, and shalt be What thou art promis'd:* ...—Shakespeare, *Macbeth* I. v. 16—7 (1606).

(そなたはグラミスの領主であり、コーダの領主でもあるのだから、予言通りの

\* *La Sainte Bible* (par Louis Segond, Paris, 1959) による。

\*\* 引用は *Shakespeare's Comedies, Histories, & Tragedies: A Facsimile Edition of the First Folio* (by Kökeritz & Prouty, Yale, 1954) による。この引用個所の直前の、*Lady Macbeth* の読む夫からの手紙の文面中に、次のように、同じ promise を直接受動構造に用いた文が見られるのは興味深い。...that thou might'st not loose the dues of reioycing by being ignorant of what Greatnesse *is promis'd thee*. (いかなる光栄が御身に約束されているかも知らず味わうべき喜びも味わずに済むようなことがあってはならぬと...)

身分にもおなりだろう。)

(27) *I was told that he scattered almost all the rest of the way with nothing but doleful and bitter complaints;…—J. Bunyan, The Pilgrim's Progress, p. 124.*

(かれはそのあとの道中ほとんどずっと悲しげな痛ましい苦情ばかりを言いながら行ったということでした。)

(28) *When we were shown a room, I desired the landlord…to let us have his company, …—O. Goldsmith, The Vicar of Wakefield III (1766).*

(わたしたちが部屋に通されると、わたしは宿のあるじにわたしたちの話相手になってほしいと所望した。)

(29) *As a child I was taught what was right, but I was not taught to correct my temper. I was given good principles, but left to follow them in pride and conceit.—J. Austen, Pride and Prejudice LVIII (1813).*

(ぼくは子供の時分に何が正しいかということをおぼわしたが、自分の性分を正すように教わったことがない。りっぱな道義は教わったけれども、それを自負心とうぬぼれの気持ちで守りさえすればよかった。)

(30) *He loves to hear tell of or to be shown something what he calls 'outlandish.'—J. Conrad, Amy Foster (1902).*

(かれは、かれのいわゆる「異国的」なものの話を聞いたり、それを見せてもらったりするのが好きなのです。)

(31) *There and then, I was given an inkling of what it must have felt like to be in the streets of Paris in 1789 or beside the bridge at Concord in 1775.—A. Toynbee, America and the World Revolution I (1962).*

(その時その場所で、わたしは、1789年にバリーの通りにいたり、1775年にコンコードの橋のふもとにいたりしたならば、どんな感じのするものであったかということをおぼろげながらも思い知らされました。)

現代英語の統語形式としての間接受動構文を、直接受動構文と対比して、その文体価値を判定することは簡単にはできないが、それが平易な口語的文体にまで自然に浸透<sup>\*</sup>し、英語の表現力を多様にし、それに円滑さと弾力性を加えていることは確かである。特に上の(30)におけるように、同一の人をさす主語に対し、間接受動態が他の叙述形式と共通して用いられる場合などは、この構造のもつ簡便な慣用性を十分に発揮しているものと言える。

\* Cf. Curme, *Syntax* p. 117 f.

## VII

英語特有の間接受動構文は中期英語の時期に発達し出したのであるが、それには、英語の構造体系が総合的から分析的に推移するにつれ、名詞や代名詞の格形態に混同をもたらしたことが、外的な要因となった。しかし、それとともに、忘れてならないのは、問題の構造そのものに潜在し、変遷を誘導した内的要因である。古期英語の *Him byþ geseald*…のような B 型の非人称的直接受動構文が母体となり、この構造そのままの語順と意味のリズムの中から、近代の *He is given*… が産み出されたのである。

ここで想起されるのは、Curme が *Gram. of the German Language* (p. 536 f.) でドイツ語の統語法について述べた次の見解である。ドイツ語で、本来、二重対格を従える *lehren* の受動態が、人を主語とする (1) *Ich werde das nicht gelehrt.* (= *I am not being taught that.*) や、ものを主語とする (2) *Das wird mich nicht gelehrt.* のような構文よりも、今日、人をさす与格を含む (3) *Das wird mir nicht gelehrt.* のような構文に、はるかに多く用いられるようになっていると説き、その理由として、古くにあった (1) や (2) における動詞と対格との密接な複合的融合感がいまでは薄れ、代わりに、受動態に目的語が付加されることに違和感が生じて来たという事情を指摘している。

近代英語でも、VI の (2) — (9) の引用例などにおけるように、直接受動構文に与格関係の要素を *to* による分析形式によって表現する傾向が見られるのは、この要素のもつ受動態の述語動詞に対する副詞性を顕示しようとする心理の現われである。しかし、英語においては、このような表現法と並んで、間接受動構文が平易な口語的文体の中にまで確立されており、受動態とものの表現との間の融合感が、ちょうどドイツの場合とは逆に、かえって近代に強く意識されるようになっていっている。英語とドイツ語との間に認められるこの言語意識の相違は、要するに、両国語間における歴史的な構造体系の差に帰せられよう。

---

\* Cf. Poutsma, *op. cit.* XLVII. § 34.